

日本聖公会いっしょに歩こう！パートⅡ  
原発と放射能に関する特別問題プロジェクト  
事務局長 池住 圭

### 日本聖公会総会決議

日本聖公会は、2012年5月の定期総会で「私たちは教派・宗派を超えて連帯し、原子力発電そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するよう求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、支え合って生きる世界をみざします」と決議致しました。この決議に基づいて、2013年6月に「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」が立ち上げられました。

事務所の設置場所に関しては、運営委員会でも議論が交わされ、福島県以外にも幾つかの候補地が挙げられました。しかし、最終的には郡山市の郡山聖ペテロ聖パウロ教会の一室をお借りしてスタートさせることになりました。これは、被災地に身をおき、原発事故で苦しんでいる人と共に居て、被災者の苦しみや困難を分かち合いなさいということと理解し、とても大切なことだと思っています。

### 郡山市に住んで

私はプロジェクトでの任にあたるため、2013年10月から郡山市での生活を始めました。住み始めてまだ1年数ヶ月と日は浅いのですが、それでも、ここに住んでいるからこそ気づけること、理解できたことが多々あると感じています。また、たくさんの方の生の声を聴く機会も与えられています。

郡山市内には、常に放射線量が高い場所がスポット的にあります。郡山聖ペテロ聖パウロ教会付近も例外ではありません。「ただ今除染作業中」の立て看板を日常的に目にします。

子どもたちを思う存分外で遊ばせることができない、洗濯物を屋外に干せない、散歩ができない、防護服に身を包んで除染作業をしている人の脇を、何事もないように無防備で通り過ぎる矛盾。街のあちこちに野積みになっている汚染土や、異常に大きくなったカエデやアサガオの葉に不気味さを感じます。ここに住む人たちは、日常生活にたくさんの不便や、それに伴う理不尽さを感じながら日々を送っているのです。

一方で、このようなことをそれほど気にせず、或いは意図的に気にしないようにして生活をしている人もいます。ここに、それぞれ放射能に対する感じ方を率直に話し合えない葛藤があります。色々なことを分かち合いたいけれど今は貝になるしかない、と心情を吐露した人もいます。多くの方が、多かれ少なかれ心に澱のようなものを抱えて生活をしています。

### 実感の持てない復興・復旧

新聞やテレビなどの報道では、復興や除染が進んでいるような印象を受けますが、多くの人にその実感はありません。年々減少しているとは言え、避難生活をしている人はいまだに26万7000人を超えます。仮設住宅で、5年目の厳しい冬を過ごしている人たちは10万人以上にのぼります。劣悪な住環境に「もう限界」との声を耳にします。行政の中心に

いると周縁が見えなくなってしまうのでしょうか、私たちの多くは置き去りにされているように感じています。

福島県は放射能汚染によって分けられた帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域を抱えているため状況が複雑で、県を中心に復興住宅の整備などを進めてはいますが、その道のりは遠いと言わざるを得ません。まだまだプロジェクトの働きを必要としている人が大勢います。

#### 「だいに東北」からの引継ぎ

「だいに東北」は、その主な働きを2015年5月末で終了することによって、6月以降は、原発による被災者支援を中心に、東北教区・諸教会のご協力を頂きながら、当プロジェクトが引き継ぐことにしています。

次期総会での見直し迄の1年半弱を、今もなお様々な苦悩の中にいる人たちに寄り添いながら、支援活動を行って行ければと思います。私たちは、遠くから郡山事務所や被災地を訪れて下さる方や、お祈りの内に多くの方が一緒に歩いて下さっていることを常に実感し、励まされています。ともすると、時の経過とともに被災地のことが忘れられてしまうのではないかと危惧を抱いています。今後も、お祈りの内にお覚え頂ければと思います。

(諸活動の詳細や機関誌などは、ウェブ上でご覧いただければと思います。)

<http://nssk.org/province/genpatsugroup/>